

西池冬扇著『非情』の俳句を考える

—造形の手法におきかえて—

〈むしろ思弁的・情緒的な理念を「情」とすることが先にあり、それを排したところにうまれる魅力を有する句を「非情」の俳句と呼ぶのである〉、〈寓意のない美の世界「非情」の俳句を、結局健吉は理解できなかった。〉と帯にある。

「非情」の俳句について、本文の第三部第一章の冒頭には、「意味を排除した俳句」、「無意味・無内容の俳句」等々と呼ばれる一群の俳句のあることを挙げ、句例として、西東三鬼の「露人ワシコフ叫びて柘榴打ち落とす」と高濱虚子の「映画出て火事のポスター見て立てり」、「川を見るバナナの皮は手より落ち」を示している。さらに、加藤楸邨の数句を挙げて「非情」の俳句を丁寧に説いている。

私は、この「非情」の俳句というフレーズに、大学の恩師の一句〈菜の花やモホリの一書訳了す〉を思い浮かべていた。恩師のこの句が、「非情」の俳句と言うのではなく、この句に詠まれたモホリを取り上げたのである。つまり『非情』の俳句の主張からまず想起されたのは、モホリ・ナギなのである。

モホリ・ナギは、一八九五年、ハンガリー生まれの写真家、画家、美術教育家である。句の〈モホリの一書〉とは、「ニユーヴィジョン」である。パウハウスの講義に用いられた構成・色彩・運動などの視点で視覚芸術の諸問題の解明を試みた著作である。

彼の所属するパウハウスは、一九一九年、グロピウスによつて創設され、純粹芸術と工芸技術との総合的發展を目的とした学校で、ドイツ、オーストリアから多くの学生が集まった。モホリ・ナギの他、ワシリー・カンディンスキー、パウル・クレー、ピート・モンドリアンらが指導者として携わった。カンディンスキーの著書『点・線・面』も、パウハウスでの講義を要約したものである。形態の基本的な要素を分析し、絵画を超えて造形一般へと意識をひろげていく。パウハウスに集った画家たちの作品が、「非情」の俳句の理念に共通するものではないかと思われたわけである。

パウハウスは、拠点であるワイマール市民がその革新性に批判的であつたために一九二五年デッサウにさらにベルリンに移転したが、一九三七年廃校になった。十四年という期間に業半ばと言う感否めない。パウハウスの合理主義的、機能主義的芸術が現代芸術に及ぼした影響は大きい。

『非情』の俳句に、パウハウスのモホリ・ナギやカンディンスキーが想起されたのは、ここでの講義を要約したモホリやカンディンスキーの著書に、〈寓意のない美の世界〉というフレーズが重なったからである。

絵画を成り立たせる形と色。その表現する内容、その主題を捨てたとき、つまり「具象性からの脱却」をはかった時、純粹な形と色のみの世界が残こされる。自由な形と自由な色彩の世界が提起する新しい世界。それは純粹抽象絵画という世界であつた。

『非情』の俳句は、今後、どう展開し、何を生み出すのだろうか。



枘田務個人誌
山桃居通信
2017/04/30

- 自分の絵
- いたどり 虎杖を描く

よもぎ つとむ 画

自分の絵

絵をかくときには、「自分自身のために」と考えていくことが大切です。このことは、他人にどう思われてもよいということではなく、他人と違っている「自分」を、絵をかくことでたしかめようとすることです。できた絵を「自分」であると思いたいものです。この意味からも、「身をいれる」ことができれば、絵にならないのです。絵をかくということは、本来まったく自由な、好きな世界をつくりだす、ということのはずです。

「図画工作」や「美術」の指導では、作者自身が自分を見失うことなく、「自分自身で自由に決めてよい場面」をつくりださなくてはなりません。学校生活の多くの教科のうちに、絵をかく時間が設けられているのは、この意味からも、重要なことなのです。

「損や得」の話では、うまい述べ方ではないでしょうが、絵をかきながら、「自分自身のために」と思えない人々は、自ら大切な「できること」を捨てている損な人だと思います。



虎杖を描く いたどり

「しらさぎ台」は、雑木山を拓いて造成した団地である。現在、千戸約三千人が住んでいる。

中央部西よりの高台に学校予定地がある。少子化でもう学校が建つことはないだろう。

この広大な土地は少年野球の「しらさぎメッツ」のホームグラウンドになっている。時々青年たちも野球大会を開催している。グラウンド北側の一辺に五十三本の桜が植わっていて、毎年見事な花を見せてくれる。

この高台の南西隅に道路を隔ててわが家がある。高台のまわりは山野草の宝庫である。季節毎の草花をスケッチして楽しんでいる。虎杖もそのモチーフのひとつである。

毎年、四月に〈今年の虎杖〉を描く。虎杖だけの画集が出来るぐらい描いた。画集「虎杖観音」と名付けよう。